

25. 大津市滋賀里 大通寺古墳群調査概要(2)

第6号古墳の調査

位置 本古墳は、大通寺古墳群の立地する丘陵の南斜面に、谷に接して築造されている。北東方向には、約20m離れて5号墳が存在している。

墳丘 以前より、竹林のため土地の削平が激しく、墳丘は旧状を全くとどめていない。しかし発掘の結果、直径約10m、高さ2mの円墳であることが判明した。しかし、特に墳丘の南半分が完全に破壊されており、石室の一部が露呈していた。外部施設としての葺石や埴輪はみられなかった。

掘り方 掘り方は、3段階の工程を経て形成されていることが判明した。

石室 本古墳の内部主体は、南に開口する横穴式である。石室の南半分は、既に破壊されており、原形に復原することは困難である。現状は、奥壁1m、側壁1.3m、高さ1.11mをはかるにすぎない。床面は地山を掘り凹めて作った基礎の上に、厚さ8cmの土を盛って整形している。その床の上には一辺約30cm位の板石を敷きつめている。石室は3号墳、5号墳のような方形プランを持たず、長方形プランであり、裾部も奥壁の幅の狭さから推して無裾と考えられる。

遺物 本古墳築造にかかる遺物は検出されず、後世、攪乱混入した埴質土器数片が検出されたのみであった。

小結 本古墳は、倭小化された石室規模から見て、6世紀前半に築造されたものと推定できる。このような古墳群の中の小規模古墳は、甲西町針の狐栗古墳群B-4号墳の例にも見られ、興味深い問題である。

第7号古墳の調査

位置 第7号古墳は、大通寺古墳群中位に存在し、丘陵の南斜面下段に築造されている。東方に第6号古墳が存在している。

墳丘 調査以前の墳丘は、竹藪造成のため著しく削られており、墳丘らしいものは認められなかったが、根跡的に径10m前後、高さ1.2m前後の高まりが認められた。発掘調査の結果、墳丘盛土は一部しか残存せ



第6号古墳

ず、当古墳の規模は明らかではない。埴輪・葺石等の外部施設はなかったと思われる。

石室 本古墳の内部主体は、散乱する巨石から、他の古墳と同様に横穴式石室と考えられた。地山以下にも及ぶ削土のため、石組が崩壊しており、石室の構造規模は不明であるが、一列に並ぶ石組列が認められ、第6号古墳と主軸を同じくするものと考えられた。また、石室前方には小石を積上げた土壇が認められた。

遺物 第7号古墳築造にかかる遺物は、須恵器細片10数片を認めたが、それにもまして、土師器片多数の出土をみた。

小結 第7号古墳は、全壊していたが、石室の主軸はようやく確認でき、ここに第6号古墳と小群を一にする古墳が存在したことが判明した。

第8号古墳の調査

位置 第8号古墳は、大通寺古墳群中低位地に位置しており、今回発掘調査の対象となった古墳中最も下位に存在している。当古墳より下方の竹藪中には8基の古墳が現存する。

墳丘 調査前の墳丘は、封土流出と後世の堆積土のため、マウンドすら定かたでなく、わずかに奥壁の一部が露出することによって古墳であることが判明したものである。調査の結果、墳丘径15m、墳高3.2mの円形墳であることが判明した。墳丘には、埴輪、葺石等の外部施設はなかったものと考えられた。

掘り方 北から南に主軸を置き、南に開口したやや

口すばまりの長方形を示す掘り方で、主軸方向に沿い現存長 7.4m、幅 4.5mをはかる。壇の深さは、北西から南東に下降する地形の影響を受けて、右壁部で70cm、左壁部で 1.2m、奥壁部で 1mをはかる。壇底は平坦であるが、やや奥壁部が高い。

石室 本古墳の内部主体である横穴式石室は、南に開口し、左片袖式の例になるもので、石室規模は現存長 6.9m、玄室長3.15m、玄室幅 2.2m、左袖幅80cm、羨道幅1.35mをはかる比較的小型の石室である。現在は天井石を失っているが、奥壁はほぼ完存しており高さ 3.2mをはかる。羨道部にあって、天井石を失うほかは保存状況は良好で、羨道高 1.6mをはかる。石室用材は、花崗岩を自然石のまま使用構築している。

玄室は、現在、奥壁3段、側壁2段が残存しており、第1段目はほぼ垂直に積み、第2段目はやや持送り、第3段目から急激にドーム型に造っている。天井石は他の古墳と同様に1石で構築されたものである。用材は比較的小さな石を使用しているが、袖部・奥壁等に

は巨石を用いている。床面のレベルは、玄室内は同一であるが、羨道部はしだいに下がり20cmをはかる。敷石、排水施設等の内部施設は全く認められなかった。

遺物 本古墳は、早くから開口していたため、盗掘をうけ、古墳营造時に直接関係した遺物は全く発見できなかった。床面上20~30cmの高さに中世の灯明皿が多数見られ、後世の古墳利用の一端を示している。その他、封土中より若干の遺物を発見した。

小結 本古墳は、正方形プラン、ドーム型持送りの石室を持っているが、片袖式であることは本古墳群中唯一であり、特異である。石室の構造・規模等は百穴古墳群中の石室と類似を示し、築造時期については、6世紀末~7世紀初頭と考えられる。

要 説

大通寺古墳群の発掘調査においては、旧規をよくとどめる4基の横穴式石室、損壊が甚しいものの横穴式石室であることのほぼ推定できるもの3基、古墓1基の計8基を検出した。

① 旧規をよくとどめる4基の古墳は、墳丘の破壊はあっても、円形であったことは推定できる。石室は、横穴式石室で、玄室が正方形ないしは横長方形の平面プランであり、加えて、側壁を底部からしばらく小石材を利用して直壁に積み、次第に上に至るとともにドーム状に持送り、巨材を使用する点は、いずれも類例の少ないものであり、大津北郊の特色ある石室といえる。こうした古墳は、紀伊・九州に若干見られる位で、全国的にも希例といえる。

② 第3号、第5号古墳から見出されたかまどのセットは、大津北郊において集中的にみられるが、大谷古墳群や福王寺古墳群で検出されたミニチュアではなく、実用品と考える極めて大型である点が注目される。このようなかまどは、大阪、兵庫、奈良に1・2例存するのみで、特殊な遺物である。かまどのセットを古墳に収める風習は、中国、朝鮮に多くの実例があるが、我国では大津北郊に特別に多く、学問上、学術的に調査された本古墳のそれは特に重要である。

③ ドーム形の石室(葬室が方形)は、わが国には例が少ないが、中国、北朝鮮に極めて普遍的であり、かま道を副葬する事実が彼地に多いことと相俟つ



第8号古墳

て、そうした中国や北朝鮮からの帰化人の関係がうかがわれる。恐らく6世紀中葉に配された帰化人の墓域と考えられる。こうした復原が行いうる古墳は他域には乏しい。

④ 第5号古墳は、横長方形の葬室というわが国には数例しかない古墳であり、紀伊岩橋千塚に1基、丹波篠山に1基をみるのみで非常に重要であり、石室の構造平面だけでなく、石材の架構法も他に例をみない。

⑤ 他の横穴式石室のうち、5、7号墳は大津北郊中でも規模雄大な石室であり、ドーム型石室の典型といえる。特に5号墳は、百穴古墳群に1基しかみられない石棺をもち、被葬者が高官であることを示している。

⑥ 第3号古墳は、大津北郊に存在する横穴式石室中、6世紀中葉に属する最古の石室で重要な意味をもっている。

⑦ 大津の地は、天智天皇の帝都であるが、帝都となった理由は、最近諸学者の説によると、帰化人の濃厚なこの地への配置とされている。伝教大師も三津首という帰化人であり、錦織氏、大友氏、大友丹波忌寸などいずれも帰化人といえる。丹波篠山にこの種の古墳がみられることは大友丹波忌寸との関連に一視点をひらくものといえる。

おわりに

発掘調査の成果は、以上のように非常に重要な結果をもたらした。当初、疏水工事、国道工事で完全に近いまでに破壊されたと伝えられ、現状また竹藪としてこのことを裏付ける感があったが、発掘の結果、保存度においては3基は希に見る良好な資料である。遺跡の重要性と良好な保存度からみて、積極的な保存と活用が望まれるのである。

(水野正好)

滋賀里大通寺古墳群分布図



26. 大津市山上町所在部屋ヶ谷(別名水車谷)古墳について

本シリーズ1号に、島田秀俊氏が、水車谷古墳の無残な破壊についての一文を寄せられた。当地域の再開発にはわたくし自身細心の注意を払い、市や県の関係者に何度も連絡を取った記憶がある。にもかかわらずこのような結果を招いた自分の非力を思わずにはいられない。

それにしても、この部屋ヶ谷古墳(当時、わたくしたちも水車谷古墳の名称をいつとはなく使っていた)は、島田氏も指摘したように、大津北郊では最南端の開口した美しい古墳であった。また、当時、竹藪を透して良好な墳丘の高まりがうかがわれ、眼下には湖水が一望できた。

私の記憶をたどれば、この古墳が、さらに北郊の宇佐山山麓や滋賀里百穴、あるいは大谷・穴太の各群集墳と異なって、その古墳数が1基しか認められないことに強く関心をひかれた。このことは、錦織、山上、別所、大門にかけて、「弘文天皇陵」を除いては、ほとんど古墳群分布の実態が知られず、当初から後期古墳は少なかったのではないかと考えられた。しかし、当地には、園城寺境内に白鳳時代に遡る寺院跡が推定され、古代氏族である錦織氏の存在も想定される中で、さらにまた、今日では大津宮跡の位置もこの錦織一帯に求められようとしている地域において、かくもその前史にあたる後期古墳が欠落していることは、その間

に何らかの相関関係があるのであろうか。

また、この部屋ヶ谷古墳の消滅の過程で、当地に、弥生後期末葉、250年代前後の、邪馬台国の女王卑弥呼の死に際してひきおこされた倭国大乱を物語る「高地性集落」が営まれていることが認められ、急提発掘調査を行なった。当初の予想どおり、標高200mの急峻な斜面に、竪穴住居跡、高床倉庫址、環濠が検出され、のろし台である焼土壇も発見された。倭国大乱に近江もその主導権を争ったものであろうか。

ここに掲載した写真は、水野正好氏の「滋賀の遺跡」に載せられたものと記憶する。水野氏と一気にも山を駆け登り、眼前に初めてとびこんできた部屋ヶ谷古墳の姿がこれである。いまでもその時の様子がまざまざと思い浮かぶ。なお、付図は、当時の立命館大学歴史学研究会考古学部の諸君が、水野氏の指導のもとで測量したものであり、製図は岡本隆子氏による。掲載にあたって末筆ながら記して感謝したい。(丸山竜平)

